

令和三年度岡山大学学位記等授与式 式辞

本日ここに、卒業生、修了生の皆さんをお迎えして、令和三年度学位記等授与式を執り行うことができますことは、皆さんだけでなく、ご家族や保護者の方々、そして私たち教職員にとっても、誠に嬉しく喜ばしい限りです。卒業生、修了生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

ウィズ・コロナとなって2年が過ぎました。皆さんは、授業、部活動、アルバイト、研究や就職活動など、大学生活の貴重な期間において、様々な制限を受けて来られたことと思います。一昨年度の学位記等授与式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために代表者のみの出席でしたが、昨年度、そして今年度は、皆さんとこの場に集まって、卒業の喜びを分かち合うことができました。また、本来であれば、多くのご来賓やご家族をお迎えし、後輩の皆さんと共に盛大に開催される学位記等授与式ですが、感染拡大防止のために、少し寂しい式典となっています。

私は、持続可能社会の実現に向けた取組みを推進する岡山大学を代表し、万感の思いを込めて卒業生・修了生の皆さんへのエールとして、これまでのSDGs活動から学んできたことをお伝えしたいと思います。

本学は、平成29年度から、国連が提唱するSDGs(Sustainable Development Goals)の達成に貢献する活動を、大学全体で取り組んでまいりました。SDGsは世界共通の社会課題を取り上げて、17の達成目標を示したものです。当初は、SDGsという言葉自体が、社会にも認知されておらず、多くの皆さんが、SDGsや本学の取組みについてよくご存知なかったと思います。

本学のSDGs推進メンバーは、まず自らがSDGsについてより深く学ぶことから始めて、岡山や世界のパートナーとともに、SDGs活動を学内外に広げてまいりました。大変有難いことに、日本政府から平成29年度の第一回ジャパンSDGsアワード特別賞をいただきました。その後も世界に向けて本学のSDGs活動を発信し続けて、令和元年7月には国連本部で本学の全学的な取組みを発表させていただきました。同時に、SDGsアンバサダー制度を新設し、学生の皆さんが自由な発想でSDGs活動に取り組める場を作って参りました。

振り返ってみると、皆さんの在学中には、平成30年7月の西日本豪雨災害や今回のコロナ禍という予測のつかない出来事が起こりました。私たちは正に、気候変動や、経済、疾病、テクノロジーなど全ての分野において、未来の予測が困難な激動の時代に生きています。SDGsを今の「流行」としてではなく、これからも変わらない「自分事」として捉えてください。令和2年度に創設し、今年度で2年目を迎えた岡山大学SDGs推進表彰(President Award)では、優秀賞6件、奨励賞5件を授与することができました。そのうち優秀賞1件、奨励賞3件が学生グループの活動であり、その中には、SDGs学生アンバサダーとして素晴らしい取組みと実績を残された方々もいらっしゃいます。皆さんも、本学での生活を通して世界共通の課題であるSDGsを、より身近に、そして自分事として感じていただけたでしょうか？

私は皆さんに世界共通の課題に地域で取り組み、誰一人取り残すことのない、より良い未来を構想することの重要性と、その手立てについて改めてお話したいと思い

ます。

その手立てとは、岡山大学がこの5年間で取り組んできたSDGs活動の4つのステップからなる基本プロセスです。まず第一に、目の前のことばかりに気をとられるのではなく、未来のあるべき姿から現在の課題をとらえなおす「バックキャストイング」。第二にその課題解決のために、多様な人々と対話して共に学ぶ「アウトサイドイン」。第三に多様な仲間とともに新たなアイデアと技術・技法を駆使して新しい価値を生み出し、課題解決に取り組む「オープン・イノベーション」。そして第四にその成果を地域・世界に向けて発信する「ソーシャル・インプレメンテーション」のプロセスです。

予測困難な時代において、これまで経験のない新たな課題を解決するためには、謙虚な態度で、周囲の多様な人々と対話し深く学びあい、協働を通じて新たな価値を生み出すことが必要です。今回のコロナ禍でもそうですが、大きな苦難に際して人は、どうしても目の前の課題にどう対応するかに関われ、視野が狭くなりがちです。しかし、変動の時代においては、未来のあるべき姿から今の課題の核心に立ち返ることが重要です。私もこの5年間、学長として学生、教職員や地域・世界の多様な皆さんと共に、SDGs活動を通じて多くの貴重な学びを経験してきました。それは正に、共に育み、共に価値を創造するという、「共育共創」の学びです。

Society5.0という情報基盤型社会において、皆さんが将来経験するであろう、様々な世界共通の課題は、その特徴として新型コロナウイルス感染症と同様に、全人類が未だ経験したことのない複雑性、多様性を持っていると思われまます。そして、これまでの経験や知識・技術だけでは、おそらく解決を勝ち取ることが難しいかもしれません。皆さんが本日迎えられた卒業・修了は、文字通りの“終わり”を指しているのではなく、皆さんにとってここから本当の「学び」が“始まる”ことを意味しています。ぜひ、皆さんも4月からの活動拠点を「新たな学びの場」としてしっかり認識していただき、生涯にわたり学び続けていただければと思います。もちろん私たちも、本学の同窓生となった皆さんの更なる「成長」を引き続き支援してまいります。

ご家族、保護者そして関係者の皆様、このたびは学位記等授与式という大切な機会がこのような形になってしまい、誠に申し訳ありません。直接お伝えすることができず、大変残念ではありますが、長い間卒業生・修了生の皆さんを温かく支えてくださった、ご家族や保護者、関係者の皆様に、心からのお祝いを申し上げたいと思います。

卒業生・修了生の皆さん、これから社会人あるいは大学院生としての新たな生活が始まります。私たち全教職員は、これからも皆さんが、母校岡山大学で学んだ伝統と精神を胸に、それぞれの新しい職場などで、自信を持ってのびのびと活躍して下さることを心から祈っています。そしていつの日か、成長した皆さんにお会いできる事を楽しみにして、私からの饞(はなむけ)の言葉とさせていただきます。このたびは誠にありがとうございました。

令和4年3月25日

国立大学法人 岡山大学長 楨野 博史